

介助コーディネーター 渡邊 琢さん



わたなべ・たく 1975年、名古屋市生まれ。日本自立生活センター(京都市南区)の介助コーディネーター。著書に「介助者たちは、どう生きていくのか」

検証 相模原 殺傷事件

識者に聞く

⊕

障害者が身近な社会に

「障害者はいなくなればいい」という考えから自分は無縁であるとか、それほどの人が言い切れるだろうか。そう思う人がいるから、地域社会から離れたところに「入所施設」なるものができるのでないだろうか。障害者とともにありたいと多くの人が願

うなら、障害者は地域で暮らし続けるだろう、あなたの身近には常に障害者がいるだろう。容疑者は元施設職員だった。人の配置や依存先が少なく他者の目が入っていない場だと、ケアする側の暴力が起きやすい。福祉職による虐待対象の8割

は、知的障害のある人たちとのデータもある。声を上げにくく抵抗できない人たちが、構造的に弱い場に置かれている。容疑者を免責するつもりはないが、社会の責任を別に考える必要がある。自戒を込めて、今まで見捨ててきたことを問い返したい。

京都の町で暮らす障害者の介助に関わり、地域で1人で暮らすのは難しいだろうと思われている筋萎縮性側索硬化症(ALS)の人や重度障害者が、京都で1人暮らしをヘルパーらとともに実現している姿に出会ってきた。当事者らと行政に交渉し、24時間の介護保障の輪が少しずつ

つ、広がってきた。

一方で知的障害者が地域で1人暮らしするのは難しいと考えられてきた。けれども、長年支援に関わり続ける中で、重度の知的障害や重複障害があっても、施設でなく地域で1人暮らしをする仲間が増えてきた。

事件後、相模原事件の現場を訪れ、元職員や入所者の家族から話を聞いた。意思疎通ができない、施設でしか生きられない人たちという刷り込みが社会にあるが、間違いだと感じる。本当に施設しか行き場がない人たちなのだろうか。制度面や人の関わり方を丁寧に考え直し、「仕方なさを解きほぐしたい。

重度の重複障害と言われながら1年半ほど前から1人暮らしを始めた青年がいる。「施設に入ると言葉を失う」と両親は言っていた。

夜、彼と一緒に近所のなじみのスーパーにいき、晩ご飯の内容を一緒に考える。時には、レストランでちよつとせいたくもする。地域の人も、最初は少し驚いていた様子だったが、最近は普通に声をかけてくれるようになった。あたりの生活だけでなく、施設ではこうした日常の社会経験が奪われる。

「重度障害者」とひとくくりにしにくい。24時間の介護保障がまだ実現していない自治体も多い。名前や存在を社会から消し去るのではなく、一人一人の生きざまを支えたい。

(聞き手・岡本晃明)